

<論文>

国立台湾師範大学附属高級中学 における二カ国語使用英語教育

Bilingual English Education in the Affiliated Senior High School of National Taiwan Normal University

鵜 浦 裕
尾 田 智 彦

1 はじめに

本論は「平成10年度札幌大学研究助成（共同研究）」として実施された「中国語解説付きの英語教材の収集と研究」プロジェクトの報告の一部である。鵜浦 裕（文化学部比較文化学科）および尾田 智彦（経営学部産業情報学科）の両名は平成10年度札幌大学研究助成（共同研究）を以下のように申請していた。

研究課題

中国語解説の英語教材の収集と研究

— 札幌大学留学生のための基礎英語教材開発に向けて（その1）—

研究目的

留学生にとって、日本語による英語学習は効率が悪く無駄も多い。日本語、母国語の両方で解説された英語教材を開発すれば、そうした弊害を取り除くことができる。今年度はとくに中国語を母国語とする留学生のための教材の研究・開発に取り組む。

研究内容

- ・中国語で解説された英語教材の収集と検討
- ・台湾の現地調査（ソフトの収集と現地の大学との意見交換）
- ・インターネットによる情報収集

- ・教材試作, 訳語データベース作成, およびそれらの公表。

申請した研究内容のうち, 今回は「台湾の現地調査」(4月27日～5月2日)で実施した国立台湾師範大学附属高級中学国民中学部の英語の授業参観について報告する。これは「現地の大学」との意見交換にあたる¹⁾。

さて文化学部および経営学部産業情報学科では昨年4月の設立以来, 毎年15名の留学生をアジアから受け入れているが, 彼らのなかには日本語や専門科目だけでなく, 英語をも積極的に学びたいと考えている学生がいる。しかしそうした英語学習熱をもつ留学生には, 英語を基礎から学ばなければならない人が多いようである。しかも, 日本語力の不十分な人もいる。ここで問題となるのは, 次のような状況である。日本語力の不十分な中国からの留学生にたいし, 担当教員が日本語で英語を教えるため, 教育効果があがらないという状況である。

このような状況を改善する方法として, たとえば教材に中国語の補助的な解説を加えることが考えられる。もちろん韓国からの留学生にたいしては, 韓国語の補助的説明を加える。こうした工夫は, たとえ中国語や韓国語ができなくとも, 私たちにもできるのではないか。そうすれば, 彼らにたいする英語教育を少しでも改善できるのではないか。こうした素朴な疑問が私たちの研究プロジェクトの出発点となった。

このように私たちの研究プロジェクトは, まず, 札幌大学における英語教育の改善として位置づけることができる。しかしそれだけではない。じつは私たちの共同研究は留学生問題の一部としてみなしたほうがよい。そうすることで, 日本の大学が今日直面している問題のなかに位置づけることができるのである。

そもそも留学生関連の問題は海外からの受け入れと海外への送り出しの2部門に大別され, 前者はさらにリクルート・入学プロセス, 在学期間中のケア(教育プログラム, カウンセリング, 経済支援など), そして卒業後の継続的コンタクト(同窓会支部づくりなど)にわかれる。このなかで現在もっとも解決の急がれる, アジアの通貨危機が留学生に及ぼす影響²⁾といった問題はリクルート及び経済支援の2領域にまたがっている。他方, 私たちの研究プロジェクトは文化学部および経営学部産業情報学科の中国からの留学生にたいする英語教育の改善であるという点で, 在学期間中の教育プログラムの検討にあたる。

留学生問題の一部としてとらえれば, 私たちの研究プロジェクトはカリキュラムの国際化のために一努力とみなすことができる。この努力を必要とするのは, 単に英語科目だけでなくほとんどすべての科目だといってよい。

日本をはじめ先進国の大学では「Junior Year Abroad」というプログラムが制度化され

つつある。このプログラムでは、大学3年の時期に1年間外国の大学で研修をおこなう。つまり各大学が短期留学生を送り出している。したがって、受け入れ側の大学では、新たに科目を創出するか、既存の科目を国際化することで、いわゆる「カリキュラム国際化」の対応を迫られている。

さらに、このような形で留学生が一定数、継続的に訪れることになると、国際化の必要性はキャンパス全体におよぶ。国際交流センターだけではなく、教務をはじめとするすべての事務が国際化しなければならないし、キャンパスをこえてそれをとりまくコミュニティ全体の国際化も視野にいれなければならないのである。

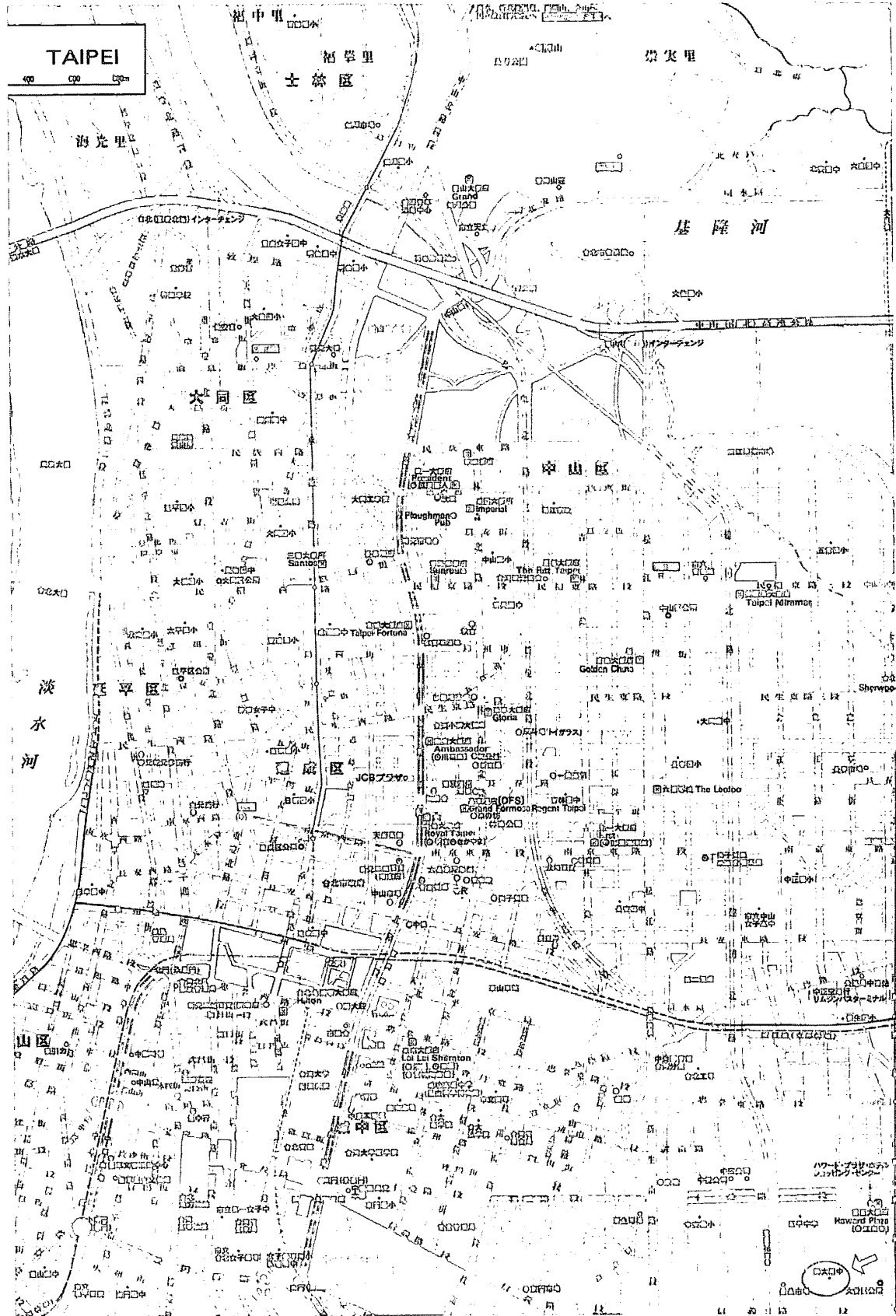
2 国立台湾師範大学附属高級中学

国立台湾師範大学（英語名 National Taiwan Normal University）はいうなれば筑波大学の前身、東京教育大学に相当する³。かつて東京教育大学が筑波大学という総合大学に変貌を遂げたように、国立台湾師範大学も4年前に普通の総合大学に変身することに決まり、現在その移行過程にある。今年総合大学としてはじめての卒業生を送り出すことになっており、彼らの就職状況によって新生師範大学の真価が問われることになるという。

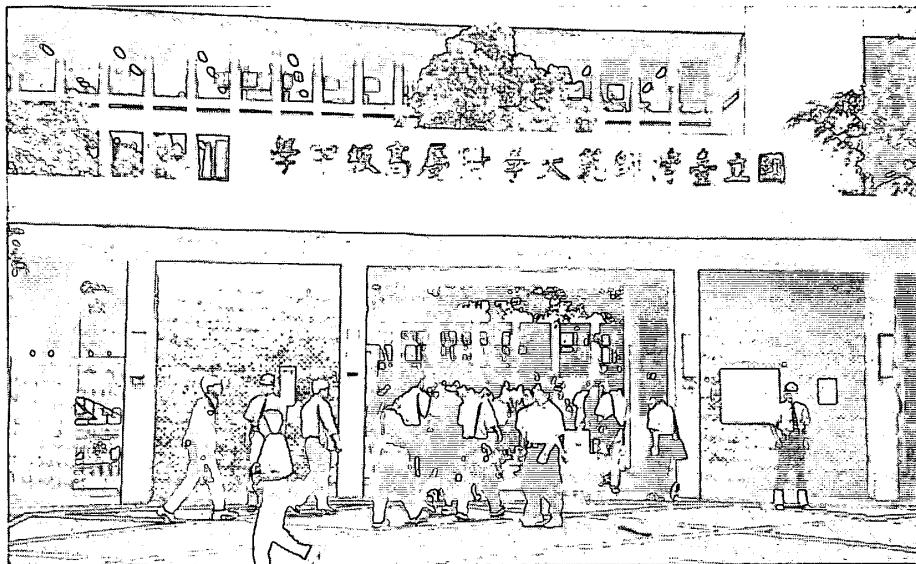
師範大学がかつての東京教育大学に相当するとすれば、その付属高級中学（英語名 The Affiliated Senior high School of National Taiwan Normal University）はかつての東京教育大学附属中学・高校に相当するといつてよい。教員や生徒のレベルは比較的高い。音楽をはじめとする芸術に秀でた生徒だけの特別コースもある。また、英語の2カ国語教育など実験的、先進的な授業が展開されている。

英語の2カ国語教育の実践という特徴が私たちの興味を引きつけた。中学レベルの基礎的な英語を中国語と英語の2カ国語を使いながら教えているという状況が私たちの関心にマッチしていた。たとえば、この授業のなかで中国語で説明される部分は生徒にとって重要な部分でもあり、理解の難しい部分であるかもしれない。そうした点を観察することにより、私たちも中国語解説を伴う教材を作るための示唆を得られるのではないかと考えたのである。

附属高級中学の位置説明をわかりやすくするために、台北市の道路について簡単に述べておこう。台北市はほぼ垂直に交差する2本の大通りで説明するとわかりやすい。南北に「中山」、東西に「忠孝」と中心となる2本の道路が走っている。そしてその交差点に台北車站（駅）がある。その交差点を境にして、「中山」は中山北路と中山南路に分かれ、「忠孝」は忠孝東路と忠孝西路に分かれる。そしてそれぞれの道路は交差点から近い順に中山



台北市の地図(南北に走る太線が中山路, 東西に走る太線が忠孝路, 右下の○で囲んだところが国立台湾師範大学附属高級中学)



登校風景

北路一段，中山北路二段，中山南路一段，中山南路二段というふうに区分されている。

東西と南北に走る2つの道路で区分される4つの区域をイメージしながら位置関係を簡単に紹介しておく。国立台湾師範大学附属高級中学（台北市信義路三段143号）は南東に位置し，近くには国父記念館がある。師範大学や台北大学はさらに南に位置する。また故宮博物館は北東に位置する。

1998年4月29日，私たちは国立台湾師範大学附属高級中学を訪問した。たまたま前日登校時に正門を訪れ写真を撮ることができた。登校のあわただしい風景は日本と変わらないが，2名の武装警官が両サイドを固めているため物々しい雰囲気が漂っていた。別に特別

警戒体制を敷いているわけではなく、警官は常駐することになっているという。この辺に近年まで戒厳令をしいていた名残りが感じられる。趙傳鳴先生⁴がおだやかな表情で出迎えてくれた。

3 授業参観

趙傳鳴先生の案内でコンピュータ室を見学したあと、私たちは午後2時から芸術専攻コースの中学2年生のクラスの英語授業を参観することになった。クラス・サイズは25名(男子5名、女子20名)。

まず録音テープから授業の一部を再現しておこう。

林老師：但你們要記住喔！ 它是以事情作主詞，不是以人，來。

(……しかし覚えてほしいことは、主語が人ではなく、事物だということです。)

我們再來聽一遍。好了。這個單字來。happen!

(もう一度読んでみましょう。happen!)

生 徒：happen!

林老師：happen!

生 徒：happen!

林老師：Ready? Next. 我們要講得是另一種單字。

(いいですか。さて、もう一つの単語を見てみましょう。)

我們提到說，有一個字，其實大家都懂，就是 something。

(この単語は、みんな知っているはずですよ。つまり something です。)

你們應該看得出來這個字是什麼意思？

(この単語を見て、意味がわかりますか？)

生 徒：某件事。

(「ある事」です。)

林老師：是指某件事，不是一些，是某件事，好。

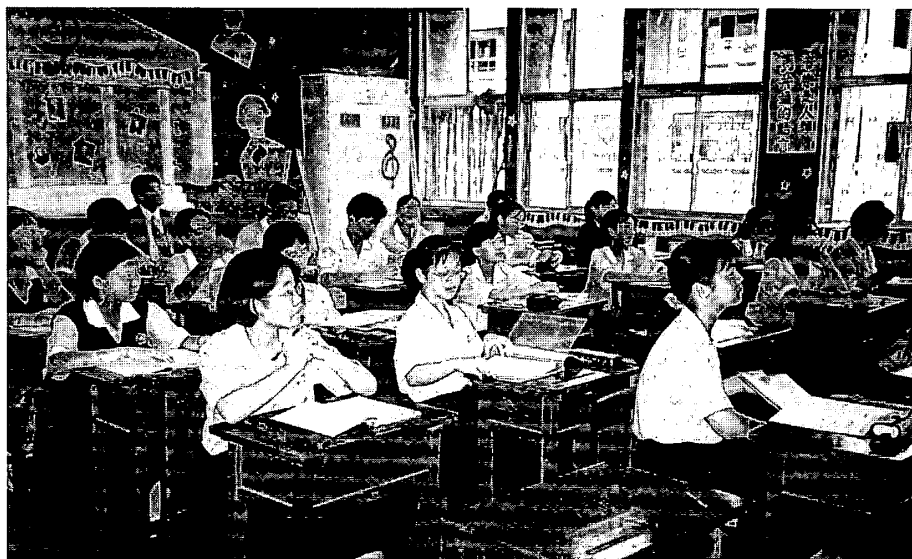
(そうです。「ある事」です。「少し」ではなくて、「ある事」です。)

我們唸唸看這個字。something!

(この単語を読んでみましょう。something!)

生 徒：something!

林老師：something!



授業風景

生徒：something!

林老師：你們一看就知道這個單字。someone!

(あなたたちはこの単語の意味も知っていますね。someone!)

生徒：someone!

林老師：something and someone. 一個講某事，一個講某人。

(something と someone, 前者は「ある事」、後者は「ある人」です。)

那這兩個字，有一個特別的用法。

(これら2つの単語には特別な使い方があります。)

今天要告訴你們的事，如果你們要用這個字的時候，請不要忘記。

(今日、みなさんに言いたいことは、この2つ単語の使い方を覚えてほしいという事です。)

一般我們講形容詞的時候，是放在名詞的-----?

(普通、形容詞を使うとき、名詞のどこに置きますか?)

如果你要形容一個人，形容詞要擺在哪裏?

(たとえば人を形容するとき、形容詞をどこに置きますか?)

生徒：後面。

(うしろです。)

林老師：不是。

(ちがいます。)

林老師：以平常的狀況，一個 beautiful girl，一個 handsome boy 你們形容詞放哪裏?

(一般的状況で, beautiful girl や handsome boy の場合, 形容詞をどこに置いていますか?)

生 徒: 前面。

(まえです。)

林老師: 這個字很特別。

(これら 2 つの単語はきわめて特殊です。)

它是形容詞擺在後面, 倒句。

(これらの形容詞はうしろにくる「倒句」です。)

所以說, 你要造句的話, 不要忘記這個名詞。

(だから作文するとき, これらの名詞に注意しましょう。)

我們再來來看看, 我們就用這兩個字來想想看。

(それでは, これらの 2 つの単語を使って作文しましょう。)

寫情書的時候, 我們最常用這兩個字來造句, something, someone。

(ラブ・レターを書くとき, よく something, someone を使います。)

我們先從 someone。我講你要寫信給女孩子。

(先に someone を使って, 女の子に手紙を書くことにしましょう。)

那女孩子, 對你來講是很特別的, 那你要說 The girl is someone special to me。

(あの娘があなたにとって特別な人であるとき, あなたは The girl is someone special to me といいます。)

生 徒: 特別? — 大笑

(特別って, どういう意味ですか? — 笑い声)

林老師: Well, maybe you are interested in some girl.

對某一個女孩很有興趣。

(まあ, あなたがある女の子に関心をもっているとしましょう。)

And you say, "The girl is someone special to me."

(そのとき, 「あの娘は僕にとって特別な人です」といいます。)

我們本來的意思就是, 她是一位很特別的女孩子。

(私たちのもともとの意味は, きわめて特別な女の子ということです。)

她對我來講很特別。

(つまり, 私にとってきわめて特別な人という意味です。)

但是當我們造句時候發現, special 是放在 someone 的後面。

(作文からわかったことは, special が someone のうしろにくることです。)



授業風景

Any question? Do you have someone special to you?

生徒：大笑。

林老師：Do you have someone that interests you? This someone must be a girl, can't be a boy.

她是一位女孩。不是男孩。

(この場合の someone は必ず女の子です。男の子ではありません。)

你們不要想歪了，好。

(ヘンなことは考えないで下さい。いいですね。)

来，我問一個人。Jerry, do you have anyone special to you?

(それでは，誰かに聞いてみましょう。ジェリー，特別な人はいますか?)

生徒：大笑。

ジェリー：Yes. 实在太多了。

(はい。けっこう多いですよ。)

生徒，林老師：大笑。

林老師：Do you have any question? 沒有嗎?

(質問はありますか?)

這個字 someone 就到此為止。

(この単語 someone の紹介はこれでおしまいです。)

我們看 something……

(つぎに something を見てみましょう……)

4 授業の詳細と評価——日本との比較を中心に——

最初に、授業の行なわれた教室の物理的環境に関して言えば、日本の中学や高校の一般的な教室とほとんど同じ大きさの部屋に対し、生徒数は25人という状況で、日本の感覚からすれば非常にゆったりとした印象を受けた。他の物理的条件、つまり、利用機器等には特別なものはなく、黒板とチョークの他には、普通のカセットテープレコーダーが使われただけであった。

参観に当たって、低学年（日本の中学2年に相当）生への「2カ国語使用の授業」ということで、当初は、いわゆるクラスルーム・イングリッシュ⁵の多用を想像していた。また、授業内容自体、25人というクラスサイズとも関連して、communicative approach⁶に基づいたoral activity（口頭による練習）が主体なのか、あるいは日本の学校で基本的に行なわれているように、ある程度reading教材を基本に据え、文型や文法事項の(体系的)導入に重点を置いているのか、様々な可能性を想定しつつ授業参観を開始した。

授業の最初は、ごく普通の挨拶から、語彙項目の復習へという形で始まった。少しでも学生の発話を促すために、挨拶などのやり取りを繰り返すといったような、定型的なクラスルーム・イングリッシュの過剰な使用は見られず、日本の教室でもごく普通に行なわれているような授業の始まり方であった。

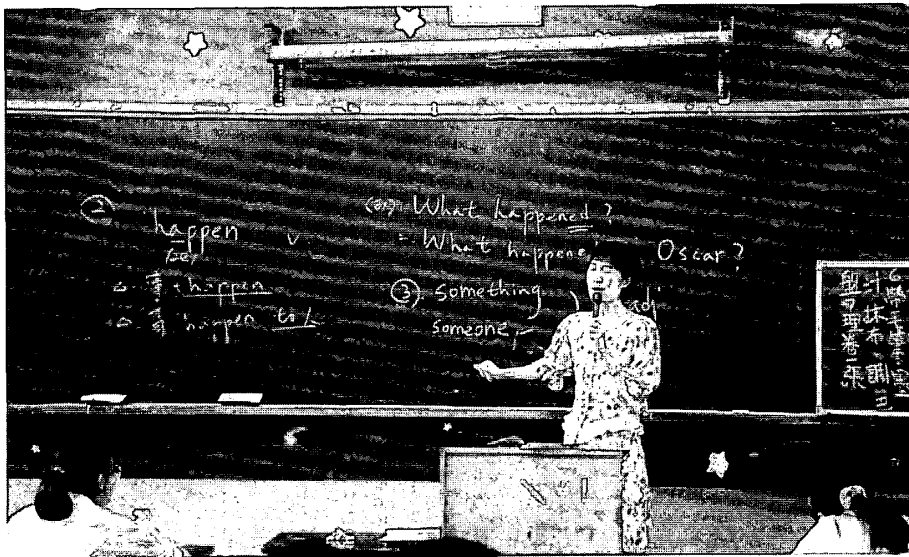
そのまま授業は、本時に学習すべき新出表現の導入へと進む。まずは、動詞‘happen’に関して、

[事柄]+happen

[事柄]+happen+to+[人]

という用法⁷が示され、次いで、‘something’‘someone’という語の提示が行われた。更に、‘something/someone+形容詞’という表現（本時の新しい学習項目の1つ）へと進んだ。ここまでの展開の中で、説明はほとんど中国語で行われ、生徒は、個々の重要語（happen, something, someone）を教師に次いで一斉に（コーラスで）繰り返した他は、説明を聞きながらノートを取るといふ、日本の教室でもごく普通に見られるような活動を行っていた。

次の展開は、しかし、特筆に価する。本論前章の、授業再現場面にも取り上げた、‘不定代名詞+後置形容詞’の提示のところである。形容詞についての若干の確認の後、‘someone+形容詞’の具体例として、‘someone special (to me)’という表現が口頭で提示され、それが「特別な思いを寄せる異性を表わす」といふような説明がなされ、生徒の関心を大いに惹きつけつつ、‘The girl is someone special to me.’という文が例文として与えられ、黒板にも書かれた。次いで、ある男子生徒を指名して、林先生が‘Do you have anyone

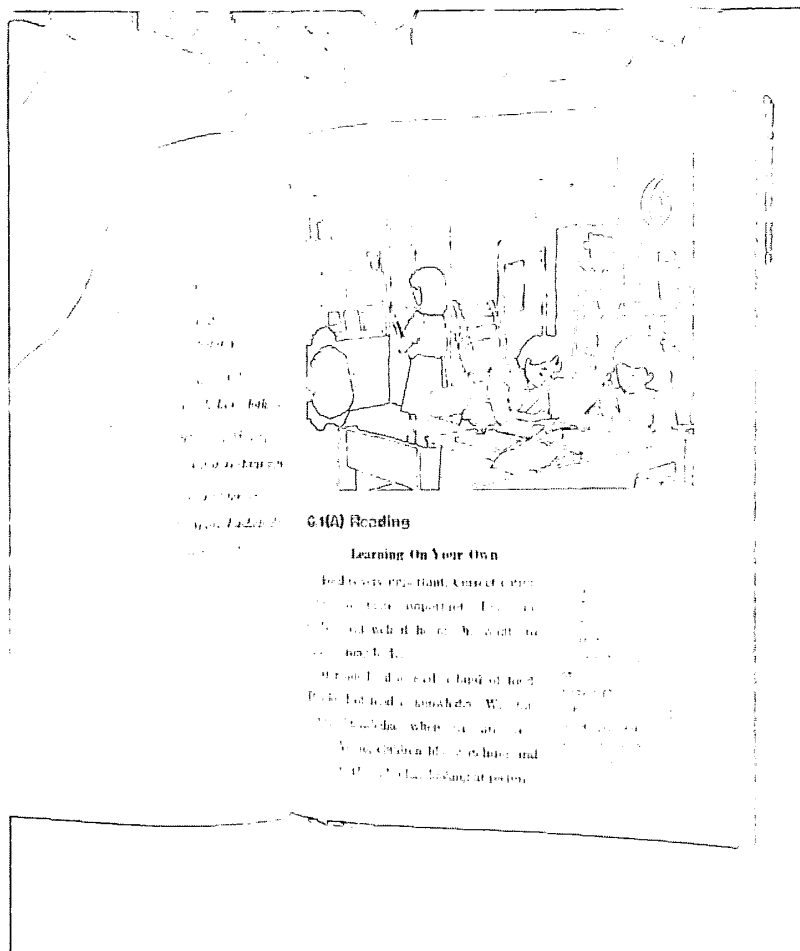


授業中の林先生

special to you?’と質問した時には、教室が笑いの渦に包まれた。

ここで痛感したのは、林教師の英語自体に対する指導力はもちろん、教師としての、生徒に対する接し方や「乗せ方」に関する抜群の技量であり、平素の生徒理解の力である。思春期の生徒にとって、言うまでもなく異性の問題は最大の関心事の1つであり、同時に非常に微妙な問題でもある。増してや、教師が授業中の題材として持ち出すためには、平素からの教師（集団）と生徒の間の絶対的な信頼関係が不可欠である。昨今、我が国のマスコミでもしばしば取り上げられている、「学級崩壊」に代表されるような、教師と生徒が互いに信頼関係を失った荒廃した状況の中では、このような話題を通して生徒を惹き付けることは、ほとんど不可能ではないだろうか。さらに、林先生がこの質問をしたときのクラスの反応から察するに、指名された男子生徒は、非常に開放的な性格で、ガールフレンドの事などでも生徒の間で話題になる事がある、という生徒だったのではないだろうか。まさに、適切な生徒に対する適切な質問で(?)、クラスが大いに沸いたのではないだろうか。生徒のあらゆることに対し敏感で、かつ生徒の厚い信頼を得ている教師のみが、このような質問が可能であろう。

次いで、‘something+形容詞’の形の練習の後、幾つかの新出語句の提示及びコーラスでの復唱が行なわれ、そのうちの1つである‘strong(est)’に関連して、‘Who is the strongest boy in this class?’⁸という質問が投げかけられた。この間の生徒の反応も非常に活発で、教師に対しても友好的である。更に、新しく学習する語句の提示・コーラスでの復唱及び簡単な説明が続く。方法としては、各語句に対してそれぞれ中国語訳を与えることはせずに、用法の説明（主に中国語）や、例文の理解の確認（英語・中国語）を中心に進められ



教科書

ていた。取り上げられた語彙項目の幾つかを挙げれば, 'correct' 'correctly' 'knowledge' 'power' 'at the last minute (どたん場になって)' 等である。

この時点で授業の開始から約15分が経過していたが, その間に, 最初の 'happen' から数えておよそ30もの語句や表現が提示された。なお, 日本の中学2年生用のテキスト¹⁰では, 1つの課 (Lesson) が大体3つのパートに分かれており, 各パートに平均で15ほどの新出語句が挙げられ

ている。つまり, 授業が (1時間に1つのパートを進むという具合に) 順調に進んでいると仮定しても, 日本の平均的な中学2年生が1度の授業の中で提示される語句は, 台湾の附属国民中学 (本時の授業) の半分に過ぎないということになる。

この後いよいよ, 教科書本文の内容理解を中心とした授業へと展開して行く。まず, 図書館を描いた絵を見せて, 生徒と簡単な英問英答を行なった。これは, 'Knowledge is Power' という本文の内容への橋渡しであるが, reading 指導理論から言えば, いきなり本文を読ませる前に, 生徒の持つ様々な事前情報を活性化させることにもなる¹¹。次に, 1分少々時間を与え, 生徒に教科書本文の黙読をさせる。それから, カセットテープ (ネイティブスピーカー吹き込み) でテキストを3~5文ずつ聞かせては, 内容に関して英問英答を行なった。「カセット+英問英答」が4度ほど繰り返された後, その間に出てきた 'a kind of / all kinds of' 等の表現について, 説明 (主に中国語) 及び練習が行なわれ, それからテキストの次の部分に進むべく, 若干の黙読の時間が与えられた後, カセットで少しずつ聞かせては内容に関する英語での Q and A が繰り返された。テキストの本文を中国語



筆者（尾田智彦）のインタビューにこたえる林先生，生徒たち

に訳すような説明は最後までほとんどなく、扱ったテキストの量は、およそ2ページ分であった。

テキストの reading comprehension に入ってから、教師の発話は英語の割合がかなり高くなった。特に、テキストの内容自体に関することは、説明も質問もほとんど英語で行なわれていた。また、英語で話しかけられても、生徒の反応は極めて良く、先に述べたような活発な授業の雰囲気は、最後まで崩れることはなかった。一方、生徒の言語活動という点から言えば、教師の発話への反応は良好だが、生徒自身の発話は 'Yes/No' というような反応が殆どであり、ある程度の長さ（数語からなる文など）の英語での発話場面はあまり見られなかった。また、英語の重要な語法等の説明はかなりの部分が中国語で行われ、英語の使用割合の高いときでも、補足的に中国語での説明が行われていた。

以上のような本授業の特徴を要約すれば、次のようになるであろう。

- ・全般に、英語のインプットの量はかなり多く、「2カ国語使用の英語の授業」と言うに十分なものであった。
- ・扱われた言語材料の程度は、日本の一般的な中学よりもやや高く、量的にはおよそ倍であった。
- ・授業やテキストの構成としては、伝統的な文法シラバスに近く、言語構造そのものの教授にもかなりの重点が置かれていた。

- ・教授方法としては、特に reading comprehension 等については、新しい教授理論が積極的に取り入れられていた。訳読法は殆ど用いられていなかった。
- ・物理的環境としては、クラスサイズの差以外には日本との違いはあまりなかった。生徒の motivation は、しかしながら、日本と比べてかなり高いようである。¹²

5 おわりに

本授業の参観は、日本と同じ EFL 環境¹³における英語の初学者の指導という視点から、極めて多くの示唆を与えるものであった。英語を積極的に使用し、学習者へのインプットを多くすると共に、基本的な文法構造等に関しては、母語を使用して理解を徹底させる。欧米等の指導理論の知見を学びつつも、自国の学習者の状況や学習環境に合わせた適切な応用を図る。同じアジアの国の英語指導を見学して得た結論は、日本の英語教育にとっても極めて当然のものであると共に、日本人英語教師に対しても、大いなる可能性を再確認させるものであろう。つまり、学生と同じ母語話者の教師が、目標言語の文法も含めた基礎的・体系的な事柄をある程度確実に指導し定着させることが、外国語学習においては不可欠である。

最後に、これらの観点を、札幌大学アジア人留学生の英語指導という初期の目的に照らして考えてみる。言うまでもなく、「留学生」と言ってもその背景や英語力・学習経験は実に多様であるが、中国や韓国など彼等の母国の多くは、いずれも EFL の環境であるという点で、日本とも共通している。つまり、彼等の多くは、日本と大同小異の環境の中で英語を学習してきていると思われる。その中で、特に英語が初学者に近い学生にとっては、その母語を通してある程度基礎的な学習をすることが、絶対必要である。その際に使用すべき教材は、少なくとも初期の段階においては、やはり伝統的な文法シラバスで構成されたものが最良ではないか。そのような教材を用意することが、英語の初学者に近い留学生を抱える札幌大学の、早急に対応すべき課題であることは間違いない。

もちろん、そのような教材の作成・収集のみで、留学生の英語指導の問題が全て解決するわけではない。母語による基礎的な教材の使用は、ある程度初期の段階に限定するべきかも知れない。一定の基礎力が身に着いた時点で、より多くの英語のインプットを受け、自らも発信するような訓練を積極的に受けるべきである。その段階に至れば、しかしながら、ESL 環境に近い国からの留学生や、ある程度英語力のある学生も含め、留学生に対する英語指導の問題は、「留学生問題」という枠を次第に離れるのではないか。それはむしろ、日本人学生に対する指導も含めた、札幌大学の英語教育そのものの改善という、また1つ

の大きな問題へと集斂して行くであろう。

注

- 1 国立台湾師範大学附属高級中学の英語の授業参観については、同師範大学の教員との意見交換のさいに私たちから申し入れ、それが受けいられる形で実現した。その意味で、「現地の大学との意見交換」の一部をなすものである。
- 2 1997年後半から起きたアジア通貨危機によって、同地域からの留学生の多くがかなりの影響を受けている。すでに『ニューズウィーク』誌(1998年2月11日号)などで報じられているように、アメリカ、オーストラリアなど同地域からの留学生を多くかかえる国では、彼らの留学期間短縮、途中切り上げ、取りやめなどが急増し、緊急対応を迫られているという。

じっさい、アジア各国の通貨はのきなみに下落し、円比で言うと1997年2月から1998年2月の1年間で、韓国ウォンは40%、タイバーツは52%、インドネシアルピアは25%、マレーシアリングギットは64%の価値しかなくなっている。

またこうした通貨危機はアジア各国の政府や民間企業の財政を圧迫しているため、奨学金の減額や打ち切りもすでに始まっている。そのため、各国の政府や企業の奨学金で留学している学生は帰国を余儀なくされる場合もあるという。また、親からの仕送りで留学している学生も同様に継続困難な状況に追い込まれている。

留学生たちはたとえば就学時間を犠牲にしてアルバイトを始めたり、アルバイト時間を増やしたりしている。また家賃の低いところへ引っ越すなど、すでにすでに自力で対応している。しかしすべての留学生がこうした対応をとれるわけではないし、またこれらの対応にも限界がある。

そこで支援策として、入学金・授業料の延納・分納、学生ローン、支援金の支給、奨学金の増額、アルバイトの紹介などの緊急対応策が考えられる。このうちいくつかはすでに札幌大学でも実施されていると思われるが、私たちはさらに細かな対応を考えていかなければならないと思う。

- 3 かつて国立台湾師範大学は高級中学や高校の教員養成を一手に引き受ける、台湾で唯一の大学だった。じっさい、優れた教員養成の実績を残してきた。しかし1994年に制度改革が実施され、他大学も教員養成コースを開設できるようになり、今年からそうした教員養成コースで資格をとった卒業生が生まれることになっている。

またこの制度改革によって、師範大学自身も単に教員養成のためだけの大学ではなく、総合大学として生まれ変わっている。このため、同大学は教員養成コースだけでなく、その他のコースにおいても、他大学との競合関係にはいつている。制度改革後、今年はじめて卒業生を出すので、その評価について同大学では神経質になっているという。

- 4 趙傳鳴氏は数学の教員で、同中学のコンピューター室を案内してくれた。現在数学で使用しているが、将来は英語の授業でインターネットを使用する予定であると説明してくれた。
- 5 ここで言うクラスルーム・イングリッシュとは、英語の教室において、指示や説明等のために頻繁に交される決まり文句のような英語のことであるが、特に初級の英語教室では、限定された定型なものに片寄る場合もあり得る。Willis (1981) は、初学者に対するクラスルーム・イングリッシュの積極的活用を次のように勧めている。

So as well as learning the specific language items that are actually being taught in the lesson,

they(=beginners) will also be practicing unconsciously a number of language skills, learning how to listen, to pick out key words and beginning to think in English for themselves, thereby reducing the amount of interference from L1, their mother tongue.

この授業では、挨拶等の形式的な表現の繰り返しは見られず、より自然なレベルで指示や説明等にほとんど英語が使われていた。従って、クラスルーム・イングリッシュを積極的に活用した授業であると言えることができる。

- 6 従来の文法構造中心のシラバスに対して 1970 年代以降にヨーロッパを中心に提案された、「概念と機能を中心にしたシラバス」(Notional-Functional Syllabus)に基づき、言語の「伝達目的」「使用目的」に重点を置く教授法である。教室での具体的な活動(activities)としては、例えば Harmer (1991) は、次の 7 つのカテゴリーを挙げている。

reaching a consensus, discussion, relaying instruction, communication games, problem solving, talking about yourself, simulation and roll play

台湾でも、他日訪れた国立台湾大学言語教育センターでは、ネイティブスピーカーの教師による小人数のクラスで、学生が教室を歩き回り、あるいはテキストを手に立ったままペアで会話をしている場面を幾つか見かけた。英米で英語教授法の指導を受けた教師の多くは、多少なりともこの教授法の訓練を受けているのが通例である。

- 7 動詞 'happen' は、現在札幌市の公立中学校で採用されている『ワンワールド』(教育出版)という教科書では、3年生の最後の課(93ページ)に初めて出ている。また、代名詞 'something' は、同教科書では2年生用の最後から2つめの課(80ページ)で初出する。なお、平成元年3月告示の現学習指導要領では、改訂の要点として「生徒の実態や指導の場面に応じて多様で活発な言語活動が行われるよう、文型・文法事項などについて学年による配当の枠を外すとともに、これらを整理し、精選を図った。」(文部省, 1989)とあるので、それぞれの語句の初出場所は、教科書によってかなりの差があることが予想される。
- 8 形容詞の最上級は、前掲教科書では2年生の中ほど(第5課, 52ページ)で扱われている。
- 9 'knowledge' という語は、我が国の代表的な学習辞典である『ジーニアス英和辞典(改訂版)』(大修館)の「重要語の表示」では、「高校基本語 約4800語」のランクに入れられている。
- 10 先に述べた『ワンワールド』を例に述べているが、どの教科書の構成も大同小異である。なお、文部省(1989)には、中学校3年間で教えるべき語彙としては「新語の数は1000語程度までとし、必須語の数は507語とした。」とある。
- 11 このあたりの授業展開は、いわゆるスキーマ理論(Schema Theory)を応用した読解指導と言えよう。スキーマ理論とは、認知心理学的立場から読解(reading comprehension)のプロセスを説明しようとするものである。Reading comprehensionとは、読み手がテキストから受動的に意味を汲み取る行為ではなく、スキーマと呼ばれる読み手の持つ先行知識とテキストの間の相互作用によって内容を再構成するプロセスと見る。この再構成した内容とテキストの情報が合致すれば理解(comprehension)の状態に達したことになる。スキーマ理論を応用したreading指導法の1つ、アメリカの小学校で行われている'The Direct Thinking Activities'では、「ストーリーの予測」「黙読」「予測を証明する」という活動を行う。外国語教育においても、平易なイントロダクションやさし絵などを提示して、あ

らかじめストーリーの内容を予測させ、(逐語訳などの)ボトムアップ的な解釈ではなく、トップダウン的に内容を確認するというような reading の指導法が次第に取り入れられつつある。

- 12 既に述べたように、この授業は師範大学付属中学という、やや特殊な条件の学校での授業であり、台湾の学校教育の平均的な状況を示すものではないかも知れない。しかし、付属中学を含め、台湾でも学校における英語教育は日本と同じように中学校から始まっており、日本の教科書との比較などは、そのまま有効であろう。一方、英語教育への(社会的な)熱意は、「英語ブーム」と言われて久しい日本と比べても、さらに激しい。台北市街の至るところに民間の英語学校が林立し、幼児から大人までの様々なコースが開かれている。授業の後で10人程の生徒にインタビューしたが、全員が、中学入学以前に塾や民間の学校で英語を習ったと答えた。
- 13 英語教育が行われる環境は、ESL (English as a Second Language) と EFL (English as a Foreign Language) とに大きく分けられる。前者は、例えば中南米から米国への移民に対して英語を教える場合や、フィリピンやインドのように英語を公用語(の1つ)とする国の学校における英語教育などが該当する。後者は、日本や韓国、中国のように、日常生活においては殆ど英語を使用しない国での英語教育が該当する。英語を学ぶ目的や動機、教室外の日常でのインプットの量、その他、英語教育のあらゆる面において、この両者には本質的な違いがある。その点を考慮せずに、ESL 主体の米国の英語教育理論をそのまま(例えば)日本に持ち込んで、有効に機能するとは限らない。なお、本学留学生の日本語教育は JSL 環境と言えよう。

参考文献

- 安藤昭一他編 『英語教育現代キーワード事典』, 増進堂, 1991年。
- 国立台湾師範大学附属高級中学「国立台湾師範大学附属高級中学 簡介」。
- 染谷正一 『教室英語表現事典』, 大修館, 1993年。
- JAFSA (外国人留学生問題研究会) 有志『緊急調査 通過危機によるアジアの留学生の現状及び問題の解決策』, 1998年2月, JAFSA 事務局(108-8345 東京都三田2-15-45 慶應義塾大学国際センター内, TEL 03-3453-4511 ex 2363)。
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ 『学習者中心の英語読解指導』, 大修館, 1992年。
- 日本アジア航空「台北市地図」。
- 文部省 『中学校指導書外国語編』, 開隆堂出版, 1989年。
- WILLIS, J. *Teaching English Through English*, Longman, 1981.
- Harmer, J. *The Practice of English Language Teaching*, Longman, 1991.

なお本論執筆にさいしては本学文化学部日本語日本文化学科の張主燕さんの協力を得た。